

ご挨拶（はじめに）

2016年は宮沢賢治生誕120年、100年記念に続く「賢治ブーム」になりました。その賢治と盛岡高等農林で一緒に学び、無二の親友だったのが、名取市増田出身の高橋秀松です。戦後は、地元の農業改革や農協活動に尽力され、行政面では増田町長、そして初代、二代の名取市長を務めました。

賢治と並んで、国民的作家の夏目漱石には、親友の正岡子規がいました。賢治もまた、親友の秀松との交友を抜きに、彼の文学はじめ、その人生を語ることは出来ない。賢治精神も、秀松との強く、深い、そして熱い友情に育まれたのではないか？

当時の盛岡高等農林は全寮制で、賢治と秀松は寮生、しかも同室で、寝食を共にしました。それだけではありません。天才的で少々変わり者だった賢治も、秀松だけには心を許し、日記や手紙も見せていました。休日は、二人仲良く盛岡市内を歩き、岩手山など山野を跋涉し、さらに江刺の地質調査にも同行しました。夏休みには、一ヵ月も上京して同じ旅館から神田神保町のドイツ語の講習会に通い勉強した。こんな深く静かに輝く友情は、それこそ賢治と秀松の二人だけのものでしょう。

二人は、東北農民が最も恐れていた冷害を解決して、東北の暗い冬を無くそう、明るい東北農村のために勉強した。高等農林では、秀松は農学第一部で一般農学・農政経済、賢治は第二部の農芸化学が専攻でしたが、共通の目的のために、秀松は稲の品種改良、病害駆除、賢治は土壌、肥料の面から、江刺の地質調査にも参加しました。しかし、当時は就職難の時代、賢治は花巻の農学校へ、秀松は遠く水戸の農学校に別れ別れになった。その後、賢治は東北農村のイーハトヴを目指して花巻に羅須知人協会を開き、さらに「ポラーノの広場」に「産業組合青年部」の活動の夢を書き残して他界してしまった。

「産業組合」は、戦前の協同組合の呼称で、今日の農協、漁協、生協などの総合統一体だった。終戦を前にして、秀松は名取に帰郷します。そして、地域の農協運動を指導し、農業改革を推進した。「日本農業の動向と名取町の農業振興について」論じ、集団的農業の重要性、そして新しい農業協同組合の意義を訴えています。とくに「農業そのものの基盤は耕地であり」「名取耕土の美田化土地改良事業」など、若き日の賢治との堅い約束を果たす事業だったと思います。そして、賢治の『農民芸術概論綱要』を説き、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と訴え続けました。

今回の企画展では、賢治と秀松の深く「輝う友情」を中心に、二人の交友と秀松の戦後の業績に関する資料を集めました。何分にも残された資料が少なく、極めて不十分です。これから市民の皆さんのご協力のもと、とくに秀松に関する資料を中心に収集し、明るい東北の建設のために、賢治・秀松に続こうではありませんか。

（大内 秀明）

